

ブセニア・アラント推進事業に伴う  
平野鼻遺跡

1988年3月

笠岡市教育委員会

## 序 文

笠岡市は瀬戸内海国立公園内に位置し、恵まれた自然の下に古くからの歴史を今に伝えている所であります。

とりわけ、風光明媚な多島美を有する笠岡諸島は、約1万年以上も前から人々の生活が営まれており、それらを示す多くの埋蔵文化財が高島・白石島・北木島などで確認されています。

このほか、笠岡諸島内の大飛島からは、遣唐使などが航海の無事を祈った跡と言われる大飛島遺跡が見つかっており、笠岡諸島周辺が海上交通の要衝としても重要な位置にあったことが偲ばれます。

この度、真鍋島において、コミュニティ・アイランド推進事業がおこなわれることとなりたため、笠岡市教育委員会で工事に先立って計画地内の埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。その結果、遺構自身は確認できなかったものの、石器などが出土し先人の足跡の一端をうかがうことができました。

小規模の調査ではありますが、この報告が地域の歴史・文化の解明の一助となることを望んでおります。

なお、この発掘調査につきまして、岡山県教育委員会・笠岡市文化財保護委員会をはじめとする関係機関、地元の皆様方から多大なご理解とご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

昭和63年3月

笠岡市教育委員会

教育長 仁科 一夫

## 例　　言

1. 本書は、笠岡市教育委員会が実施した「天神鼻遺跡」の発掘調査の概要報告書である。
2. 遺跡は岡山県笠岡市真鍋島字平山3635・3636番地外に所在する。  
まなべしま ひらやま
3. 発掘作業は、教育委員会文化課職員網本善光が担当し、昭和62年12月21日から25日まで実施した。
4. 出土遺物の整理、報告書の執筆は網本がおこなった。
5. 本書に使用したレベルの数は海拔高である。方位は磁北である。
6. 本書第2～3図に使用した地形図は、笠岡市発行の50,000分の1地形図及び、25,000分の1地形図を使用したものである。
7. 発掘調査で出土した遺物、及び実測図・写真類は、すべて笠岡市教育委員会で保管している。

## 目 次

序 文	
例 言	
第 1 章 序 説 .....	1
第 1 節 地理・歴史的環境 .....	1
第 2 節 調査の経緯 .....	3
第 3 節 調査の体制 .....	3
第 2 章 調査の概要 .....	5
第 1 節 調査の経過 .....	5
第 2 節 調査の結果 .....	7
第 3 章 まとめ .....	15
天神鼻遺跡発掘調査概要 .....	15
第 4 章 付 編 .....	16
第 1 節 天神鼻遺跡出土の土師器・須恵器について .....	16
第 2 節 城山採取のナイフ型石器について .....	18

## 図 目 次

第 1 図 笠岡市位置図(1/1,000,000) .....	1
第 2 図 真鍋島周辺図 (1/50,000) .....	2
第 3 図 天神鼻遺跡周辺図 (1/25,000) .....	6
第 4 図 天神鼻遺跡調査区域図 (1/1,500) .....	8
第 5 図 トレンチ 1 実測図 (1/150) .....	9
第 6 図 トレンチ 2 実測図 (1/150) .....	10
第 7 図 トレンチ 3 実測図 (1/150) .....	11
第 8 図 トレンチ 4 実測図 (1/150) .....	11
第 9 図 トレンチ 5 実測図 (1/150) .....	12
第 10 図 トレンチ 6 実測図 (1/150) .....	13
第 11 図 トレンチ 7 実測図 (1/150) .....	13
第 12 図 トレンチ 8 実測図 (1/150) .....	14
第 13 図 トレンチ出土遺物実測図 (1/2) .....	14

第14図 天神鼻出土器・須恵器実測図(1/4) .....	16
第15図 城山採取石器実測図(1/2) .....	18

## 図版目次

- 第1図 真鍋島空撮写真  
 第2図 天神鼻遺跡遠景(本浦港から西を臨む)  
 第3図 天神鼻遺跡調査着手前(A地区周辺)  
 第4図 天神鼻遺跡調査着手前(天神社から南を臨む)  
 第5図 天神鼻遺跡調査着手前(C地区周辺)  
 第6図 A地区調査風景  
 第7図 A地区調査終了写真(南側から)  
 第8図 B地区調査終了写真(南側から)  
 第9図 C地区調査風景  
 第10図 トレンチ1調査終了写真(北側から)  
 第11図 トレンチ2調査終了写真(西側から)  
 第12図 トレンチ3調査終了写真(東側から)  
 第13図 トレンチ4調査終了写真(北側から)  
 第14図 トレンチ5調査終了写真(西側から)  
 第15図 トレンチ6調査終了写真(南側から)  
 第16図 トレンチ7調査終了写真(北側から)  
 第17図 トレンチ8調査終了写真(東側から)  
 第18図 トレンチ出土遺物  
 第19図 天神社(南側から)

## 第1章 序 説

### 第1節 地理・歴史的環境

岡山県笠岡市は岡山県の西南隅に位置し、東を浅口郡、北を井原市・小田郡、西を広島県福山市・深安郡に接している。そして、その市域は、国指定の名勝地である「高島」・「白石島」を含む島地部と、海岸部から旧山陽道付近におよぶ陸地部とから形成されている。

今回発掘調査を実施した真鍋島は、島地部を形づくる笠岡諸島の南側に含まれる。笠岡港から約11kmの沖合にあって、本州側と四国側のほぼ中間地点に位置する全周約7.4kmの小島である。島内には東側の城山と西側の城山の二つの小山があり、この周囲の海岸に面した部分に本浦・岩坪の集落が存在する。

島内の埋蔵文化財については、東側の城山でナイフ型石器が採取されているほかに、今回の発掘調査を実施した天神鼻周辺からは縄文時代早期の土器片が採取されている（註1）。總じて、笠岡諸島からは旧石器時代・縄文時代の遺物が多数発見されており、この地域が、天神鼻遺跡の営まれていた當時陸化していたと思われる瀬戸内海の低地を見下ろす良好な場所であったことが推察される（註2）。



第1図 笠岡市位置図 (1/1,000,000)

弥生時代・古墳時代の遺跡には乏しいが、天神鼻に立つ天神社建立で明治期に出土したとされる土師器・須恵器が注目される。20数年前には、古墳の石室の一部も天神社の裏に見ることができたと言われているが、その後の整地などのためか現状では確認することができなかった。

中世以後の真鍋島に関しては、「真鍋氏」との関係に着目される。真鍋氏は、既に「平家物語」や「源平盛衰記」にその名が見られるが、在地の開発領主としての真鍋氏の姿をそこに看取ることができる（註3）。

この真鍋氏との係わりで説明さ

れるのが島内の城山・<sup>じょうざん</sup>城山などに残る中世の山城跡である。いずれも往年の降盛を偲ぶことは難しい状態であるが、その中でも西側の城山に残る真鍋城跡（市指定史跡）については石組などが比較的よく残されており、中世の水軍の跡をとどめる史跡のひとつといえる。

このほか、島内には真鍋氏関連の文化財として、真鍋島西端の沢津丸にある模灰岩製の石造宝塔（高さ1.17m平安末～鎌倉期 県指定石造美術品）や真鍋島岩坪の共同墓地内に残る五輪石塔群（平安末～戦国時代 市指定石造美術品）などがあり、中世真鍋水軍の繁栄を現在に伝えている。

なお、上記の記載については、笠岡市史編さん室・笠岡市文化財保護委員の方々から有益なご教示をいただいた。記して感謝いたします。

註1：瀬戸内考古学会「瀬戸内地区押型文土器出土遺跡地名表」『瀬戸内考古学』1 1957

註2：平井勝 「繩文時代」『岡山県の考古学』 1987

註3：『笠岡市史 第1巻』 1983



第2図 真鍋島周辺図 (1/50,000)

## 第2節 調査の経緯

笠岡市真鍋島は「花の島」・「歴史の島」あるいは「ふるさと村」として、岡山県下でも名だたる観光拠点となっているものの、若年層の流出による人口の減少が続き、昭和60年現在の高齢化比率が35%にも達するなど、地域社会の活力低下が見られている。

こうした現状を打破するため、島の特性と地域資源を生かして、島をフリーライブとして整備し、自然回帰・人間性回復の場として他地域との交流を推進することにより、活力ある地域社会の形成を図ることを目的として、昭和62年度にコミュニティ・アイランド推進事業が計画されたのである。

計画には、真鍋島天神鼻地区周辺の、「ふれあいパーク」と名付けた公園の造成が含まれていた。この「ふれあいパーク」は総面積4,350m<sup>2</sup>で、花の広場(2,185m<sup>2</sup>)・フィールド・アスレチック(1,962m<sup>2</sup>)を中心に関連施設や遊歩道を整備するものである。天神鼻周辺が岬状にとびだしており、瀬戸内海の美しい景色を堪能できる場所にあることから、観光の新たな資源として期待されているのである。

ところが、当該計画地が周知の埋蔵文化財である天神鼻遺跡（散布地・縄文時代）に隣接する部分であることから、同事業の担当課である笠岡市企画部企画財政課より笠岡市教育委員会に対し、昭和62年7月29日付で、文化財保護法第57条の3第1項にもとづく発掘通知の進達の依頼があった。そこで、担当課と教育委員会文化課による事前の分布調査をおこなったところ、工事予定地内や付近から縄文土器片及び土師質土器片を採取することができた。

この結果を踏まえた協議の結果、工事の施工前に教育委員会による発掘調査を実施することで合意に達し、発掘通知を進達したところ、昭和62年8月14日付で発掘調査を実施する旨の通知を岡山県教育長から得たものである。

実際の調査については、市企画財政課の経費負担とし、市教育委員会文化課が対応することとなり、文化財保護法第98条の2第1項にもとづく発掘通知の提出後、T・事契約・トレンチ予定場所付近の立木の伐採の終了を待って、昭和62年12月21日から25日まで実施した。

## 第3節 調査の体制

当該発掘調査は、笠岡市教育委員会がコミュニティ・アイランド事業に伴って実施したものである。

発掘調査は、笠岡市文化財保護委員会の指導を受けながら、笠岡市教育委員会文化課が担当した。

調査体制は次のとおりである。

天神鼻遺跡

笠岡市教育委員会	教育長	仁科 一夫
文化課 文化課長（兼庶務施設係長）	斎藤 昭敏	
主 幹（兼文化係長）	石井 秀明	
庶務施設係 主 事	高石 彰子	
同 主事補	岩崎 仁司	
文 化 係 主 事	網本 善光	（調査・整理担当）

現地での資材運搬・発掘作業などには次の方々のご参加をいただいた。

大塚政雄・數口民子・久一守司・元平静夫・森上京治郎・山下幸子・山下幸信

発掘作業の実施・報告書の作成に際しては、笠岡市文化財保護委員の方々から有意義なご教示・ご指導を賜ったほかに、担当課である笠岡市企画部企画財政課、笠岡市真鍋島出張所の方々からも多大なご協力をいただいた。記して厚く感謝いたします。

## 第2章 調査の概要

### 第1節 調査の経過

天神鼻遺跡は、真鍋島西北の舌状にとびだした尾根の先端部に位置し、北に北木島、西に大飛島・小飛島などを臨む場所にある。ちょうど、島内の二つの集落のうち西側に位置する本浦地区をその最奥部とする湾の入口にあたる。そして、この天神鼻地区と対岸の北木島丸岩地区との間の海峡は約2kmとせばまっており、海流の影響もあってかナウマン象などの化石骨が底引網漁などの際に引き上げられておる場所である（註1）。

また、天神鼻地区では、既に明治年間に天神社付近の石垣工事の際に土師器・須恵器が出土しており、これらは真鍋島歴史民俗資料館で保管されている（註2）。これ以外に縄文早期の土器も採取されている（註3）ことから、天神社を中心とした尾根全体が天神鼻遺跡として笠岡市遺跡地図に掲載されているものである。

今回のコミュニティ・アイランド推進事業に伴う「ふれあいパーク」の造成予定地が天神鼻遺跡の範囲内及び隣接しており、事前の分布調査においても土器の小破片を採取することができたために、この公園に伴う諸施設の造成・建設予定場所に対し、トレンチによる範囲確認を主眼とする調査をおこなった。

調査は昭和62年12月21日に着手し、2地点の全面調査と散布地1箇所のトレンチ調査をおこなって、12月25日に終了した。調査場所は北側から順に、尾根最先端部のA地区（展望台建設予定地）・天神社南側のB地区（給排水施設建設予定地）・尾根上方のC地区（公園造成予定地）と名付けた。

註1 この海底から引き上げられた化石骨にはナウマン象の臼歯やニホンジカの角などがあり、現在笠岡市立郷土館で収蔵・展示している。

註2 明治35年の出土として、須恵器4点・土師器1点が展示されている。今回の報告に係り、付篇として概要を報告しているものである。

註3 笠岡市文化財保護委員の方々、とりわけ、開壁忠彦氏（倉敷考古館館長）・中野勇氏・松浦竜司氏・真鍋礼三氏から有益なご教示をいただいた。記して厚く感謝します。

#### ・日記抄

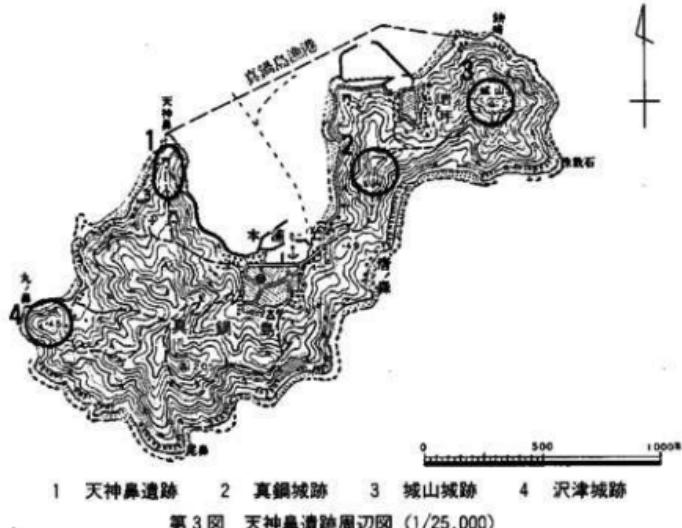
昭和62年12月21日（月） あらかじめ笠岡市役所真鍋島出張所にまで運んでおいた資材を現地までリフトなどを用いて搬入。

調査地区周辺の分布調査を実施。

A地区の全面調査実施。出土遺物・遺構なし。

天神鼻遺跡

- C地区に北側から5本のトレンチ場所を設定する。  
トレンチ4の調査着手。ナイフ型石器出土。
- 22日（火） トレンチ5の調査着手。土師質土器片など出土。
- トレンチ1の調査着手。土師質土器片など出土。
- 23日（水） トレンチ4・5実測。  
トレンチ2の調査着手。サスカイト片・土師質土器片など出土。  
C地区内にトレンチ3本を追加して設定する。
- 24日（木） トレンチ3調査着手。出土遺物・遺構なし。  
トレンチ6・7（追加トレンチ）調査着手。出土遺物・遺構なし。  
トレンチ1・2・3実測。
- 25日（金） トレンチ8（追加トレンチ）調査着手。上師質土器片出土。  
B地区の全面調査着手。川土遺物・遺構なし。  
トレンチ6・7・8、B地区実測・測量。  
資材の搬出。



## 第2節 調査の結果

### 1. A地区の調査（第4図）

A地区は尾根の最先端部の笠岡市真鍋島字平山3635-1番地に位置し、標高は約29mである。三方を海に面しており、「ふれあいパーク」の展望台が予定されている場所であるが、天神社付近であることから、全面調査を実施した。調査面積は約30m<sup>2</sup>である。調査着手前から松林がわずかに残るもの、既に尾根上の土砂は大半が流されていた。表上下約10cmで淡黄褐色～明黄褐色の花崗岩の岩盤層に到達したけれども、調査に伴って遺跡の存在を示す遺物・遺構は確認できなかった。

A地区からは急斜面がさらに下がって、海にまで達している。この周囲には、花崗岩の巨石があちこちに露出しており、要害として、また、天神鼻から東側に深く入りこんだ本浦地区の集落や<sup>城山</sup>（真鍋城跡）も臨めることから、例えば、物見台的な役割を果たしうる位置的条件は有している場所であるといえる。

なお、A地区と天神社との間にも花崗岩の露出が多く見られ、中には人工的な加工すら想像させるものも含まれている。20数年前には、古墳の石室と思われるものが確認できたとされるけれども、現状は、特に天神社周囲での造成がおこなわれている結果、ほとんどの岩が埋もれてしまっており、今回の調査により明確に古墳の痕跡を確認することはできなかった。

### 2. B地区の調査（第4図）

A地区から南側に約100m山頂に向かった、笠岡市真鍋島字平山3635-2番地に位置する。標高は約33mである。松林に覆われており、「ふれあいパーク」の排水施設が建てられる予定地であるが、天神社付近であるうえに、事前の分布調査で上師賀土器の小破片が採取されていたことから、全面調査を実施した。調査面積は約63m<sup>2</sup>である。

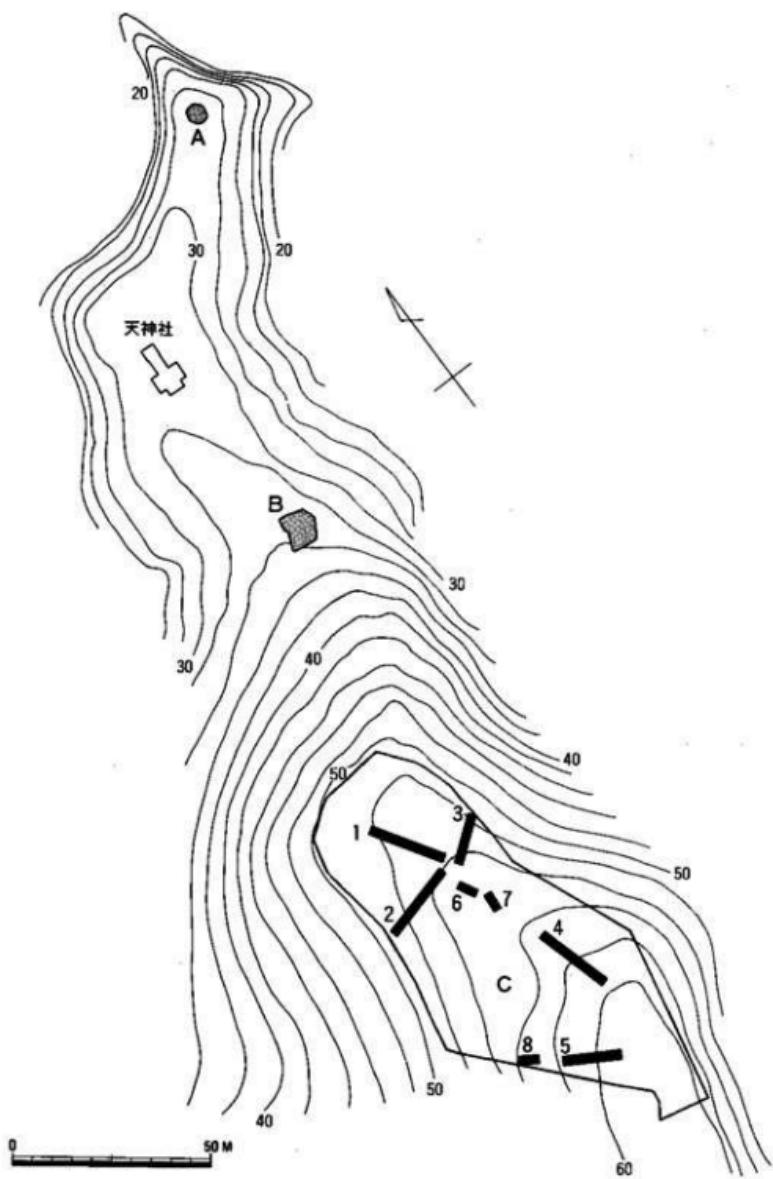
尾根の東側斜面にもあたることから、土砂の流失が多く、表土下15～25cm程度で淡黄褐色の花崗岩の岩盤層に到達した。調査に伴って、小破片の上師賀土器が數片出土したものの、図示できるような遺物や遺跡の存在を示す遺構は確認できなかった。

### 3. C地区の調査（第4～13図）

天神社建立にもとづく整地はB地区までにとどまり、B地区から南側のC地区を含む部分は尾根地形がよく残されており、保安林としても機能している地域である。

笠岡市真鍋島字平山3636-2番地に所在し、山頂に向かって、標高50～60mの範囲内にあたっている。

天神鼻遺跡



第4図 天神鼻遺跡調査区域図 (1/1,500)

全域に松林が形成されており、尾根筋に沿って「ふるさと村」事業に関連する遊歩道も敷設されている。天神鼻遺跡そのものの範囲が、尾根南側にどこまでのびるのかは、従来の分布調査においても不明であったことから、「ふれあいパーク」の予定地内に、遺跡の範囲確認のためのトレンチを設定したのである。

まず調査の着手に先立って、トレンチ設定のための表面観察・分布調査を実施した。その結果、C地区北半の「フィールド・アスレティック」予定地周辺で比較的平坦な部分が、また、C地区最高部付近の「花の広場」予定地周辺で土師質土器の細片が採取できたことから、北側から順に1~5の5本のトレンチを設定して掘り始めた。

さらに、それらのトレンチ調査の状況や、尾根の鞍部で部分的に傾斜の緩やかな場所も確認できたことなどから、トレンチの追加もおこなった。なお、尾根の西側は、現状では小規模の崖地形を各所にとどめていて、松の木の根による地表面下の攪乱も著しいと判断でき、トレンチは設定しなかった。

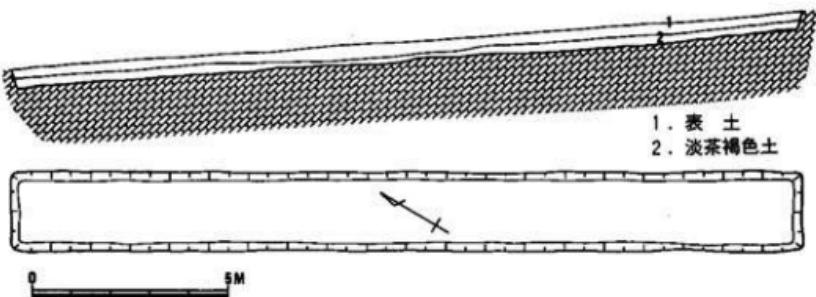
#### トレンチ1（第5図）

トレンチ1は、C地区の北半へ尾根の中軸線に沿って設けたものである。規模は、2m×20mのもので、標高52~53mの位置にある。

表土下20~25cmに淡茶褐色土がはいるが、その層も10~15cmと薄く、その下は淡黄褐色の花崗岩の岩盤に達している。

淡茶褐色土層中より、土師質小皿の口縁部片（1）のほかに、土器の細片が出土したがいずれも図示できるものではない。また、遺構を示すものも確認できなかった。

— L = 55.0M —



第5図 トレンチ1実測図 (1/150)

## トレンチ 2 (第 6 図)

トレンチ 2 は、C 地区北半の尾根西側の緩斜面に、等高線に直交するかたちで設けたものであり、トレンチ 1 とはほぼ直交する場所になる。規模は、2 m × 20 m のもので、標高 50 ~ 53 m の位置にある。

土砂の流失が激しく、トレンチ上方（東側）では 20 cm 程度、下方（西側）では 30 cm 程度の表土の下に淡茶褐色土が 10 ~ 30 cm 程度はいって、淡黄褐色の岩盤に達している。

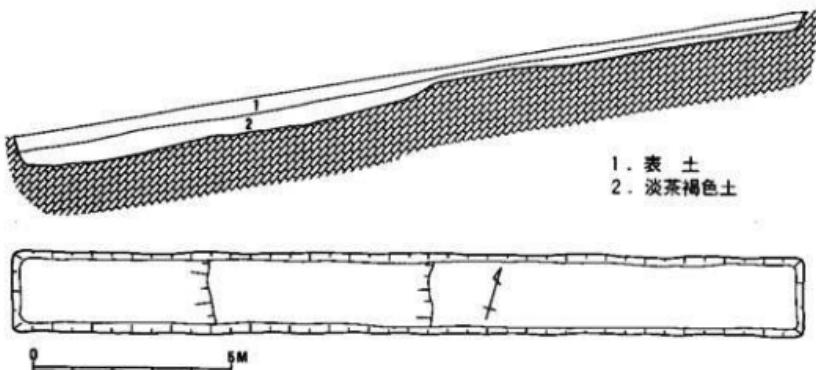
全体的に松の根による搅乱が著しく、淡茶褐色土層中でも松の木の根にからんだような状態で、トレンチのはば中央部からサスカイトの小剝片が 2 点出土した（2・3）ものの、その他は細片の上師質土器が数片の出土であったのみである。剝片はいずれも風化が著しく、3 については一部に刃部形成も認められるものの不明瞭なものである。また、遺跡の存在を示すような遺構も確認できなかった。

## トレンチ 3 (第 7 図)

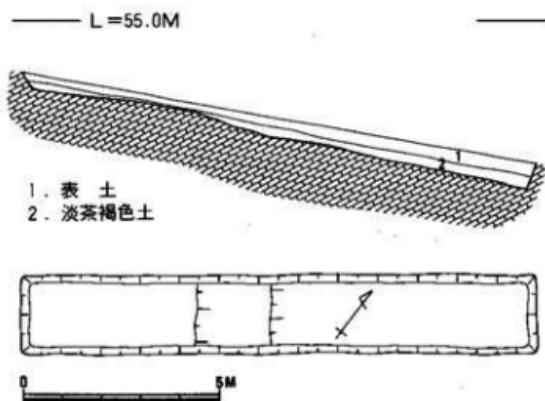
トレンチ 3 は、C 地区北半の尾根の東側斜面に、等高線に直交するかたちで設けたもので、トレンチ 2 とは尾根筋をはさんではば対象の場所になる。規模は、2 m × 13 m のもので、標高 51 ~ 53 m の位置にある。

土砂の流失はとりわけ激しく、トレンチ上方（西側）では 15 cm 程度、下方（東側）では 25 cm 程度の表土の下に、淡茶褐色土が 5 ~ 30 cm 程度はいって、岩盤に達している。トレンチ下方で特に松による搅乱が著しく、遺物や遺構はいずれも確認できなかった。

—— L = 55.0M ——



第 6 図 トレンチ 2 実測図 (1/150)



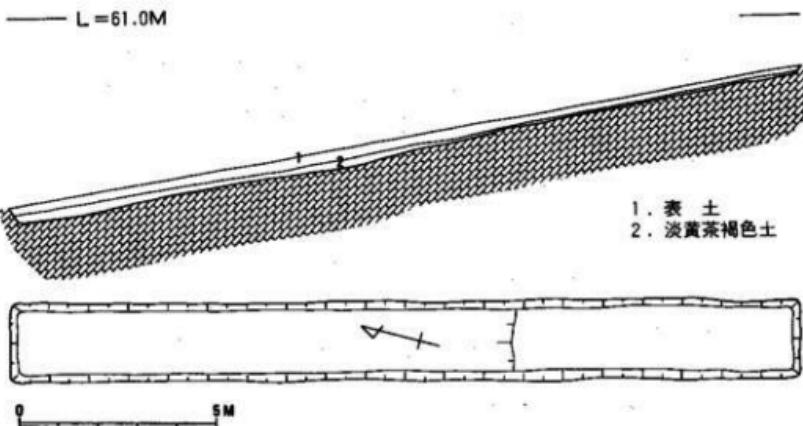
第7図 トレンチ3実測図 (1/150)

## トレンチ4（第8図）

トレンチ4は、C地区南半の尾根鞍部に、等高線に直交するかたちで、ほぼ尾根の中軸線上に設けたものである。

規模は、2m×20mのもので、標高56～60mの位置にある。

土砂の流失が激しく、トレンチ上方（南側）で10cm、下方でも15cm程度の表土の下に5～20cm程度の淡黄茶褐色の花崗岩の風化土がはいっており、さらに、淡黄褐色の花崗岩の岩盤に達している。



第8図 トレンチ4実測図 (1/150)

淡黄茶褐色土の中でも、松の木の根にからまつた状態で、トレント上方（南側）からナイフ型石器が1点出土した（4）他には遺物・遺構は確認できなかった。4の石器はサヌカイト製で、不整形な継長剝片の長辺に刃部を作り出したものである。

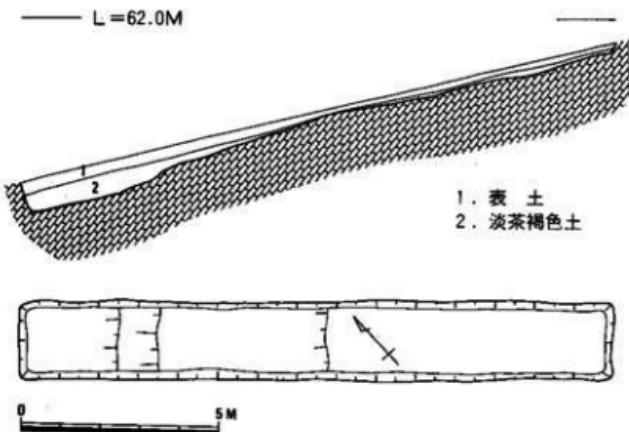
#### トレント5（第9図）

トレント5は、C地区南半の尾根西側斜面に、等高線に直交する形で設けたものである。規模は、2m×15mのもので、標高58～61mの位置にある。

調査前の分布調査では、土師質土器の破片が採取されてもいるところで、その中には、焼成の具合から繩文土器かとも考えられるものも含まれていた。さらには、造成予定地外になるけれども、調査区西側の畠からは土師質土器の細片も採取されていた。

調査の結果、表上下20～30cmで、淡茶褐色土の層がはいり、トレント下方（東側）ではこの淡茶褐色土の堆積は50cm程度となっていた。この土層中からは、近世陶磁器の小破片が出土したほかに、土師質土器の破片も数点出土しているが、いずれも図示するほどの大きさは持っていないものばかりである。

淡茶褐色土の下には、花崗岩の岩盤があらわれている。トレント内で部分的に小規模の段が検出されたが、いずれも自然地形と判断され、遺構は確認できなかった。しかしながら、土砂の流れ方からして、さらに下方に遺物の出土も期待されることから、トレント5より約5m離れてトレント8を設定した。



第9図 トレント5実測図 (1/150)

## トレンチ 6 (第10図)

トレンチ 6 は、C 地区のほぼ中央部で現在の遊歩道のところより西へ約10mはいったあたりに平坦な部分を確認したことから、追加して設定したトレンチのひとつである。

このあたりは比較的平坦な場所であるとはいって、完全に松林の中に含まれており、松の大木を避けながらトレンチを設定したために、規模としては、 $2\text{ m} \times 5\text{ m}$ と、小型のものにならざるをえなかった。標高は54m付近に位置する。

調査の結果、20cm程度の表土の下には、5~10cmに薄く淡黄褐色土がはいるにすぎず、地表下30cm程度で明黄褐色の岩盤に到達した。トレンチ内からは遺跡の存在を示す遺物や遺構は何ら確認できなかった。

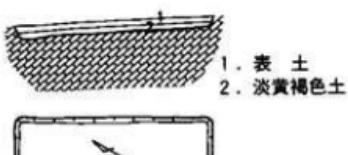
## トレンチ 7 (第11図)

トレンチ 7 はトレンチ 6 と同様に、C 地区のほぼ中央部に設定したもので、トレンチ 6 の南側約2mのところへ、木々を避けながらもおおよそトレンチ 6 の延長線上になるようにしたものである。

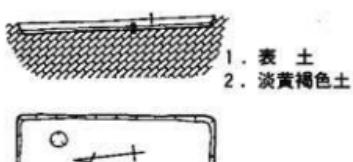
規模は、トレンチ 6 と同じく $2\text{ m} \times 5\text{ m}$ と、小さいものであるが、両者を合わせて、約10mのトレンチをこの平坦部に設けることを想定したのである。

調査の結果、20cm程度の表土の下に10cm程度に淡黄褐色土がはいり、さらに明黄褐色の岩盤があらわれた。基本的にはトレンチ 6 と同じで、遺跡の存在を示す遺物・遺構は何ら確認できなかった。

トレンチ 7 では直径40cm程度の不整形なくぼみが検出されたが、ビットにはなりがたく、樹木の根株の跡と判断した。

L=56.0M0 2M

第10図 トレンチ 6 実測図 (1/150)

L=56.0M0 2M

第11図 トレンチ 7 実測図 (1/150)

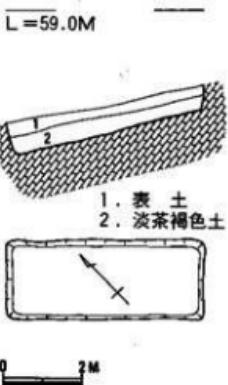
## トレンチ 8（第12図）

トレンチ 8 は、C 地区南半の尾根西側斜面に、等高線へ直交する形で設定したものである。トレンチ 5 の調査により、小破片ながら土器を含む淡茶褐色上層が確認されたことから、遺物の採取を目的としてトレンチ 5 の延長線上で、調査予定地の端に設けたものである。このトレンチと上のトレンチ 5との間には松の巨木の切り株が残り、さらには、深くえぐられて小規模の崖地形を呈している。

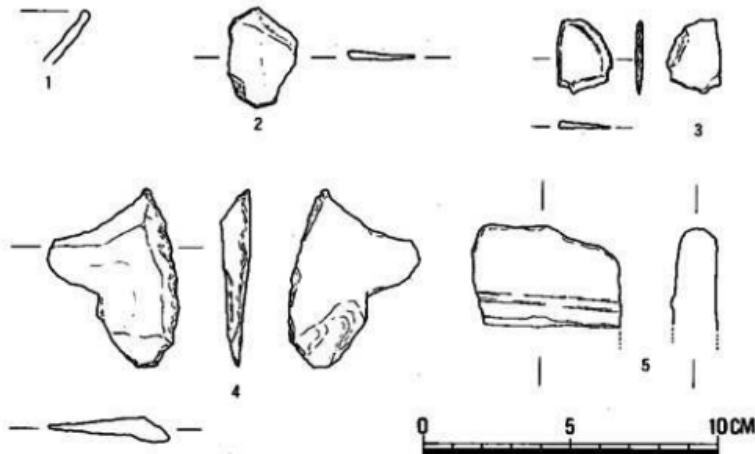
規模は、 $2\text{ m} \times 5\text{ m}$ の小型のものである。標高は、 $56\sim 57\text{ m}$ に位置する。

土砂の流失は激しく、 $15\sim 20\text{ cm}$ の表土の下に $50\sim 60\text{ cm}$ にわたって淡茶褐色土がみられ、その下には明黄褐色の岩盤があらわれる。この淡茶褐色土の中から土師質土器の小破片が數片出土した。そのうち 5 は土師質で暗茶褐色を呈する厚手のものであり、全体の形状は不明であるが、一面には低い凸縁状のものが作り出されている。このほかはどれも小破片であり、図示することはできなかった。

また、遺構についても何ら確認することはできなかつた。



第12図 トレンチ 8 実測図  
(1/150)



第13図 トレンチ出土遺物実測図 (1/2)

### 第3章 まとめ

#### 天神鼻遺跡発掘調査概要

笠岡市真鍋島天神鼻遺跡の発掘調査の結果、以前に土器の出土していた天神社付近の調査区からは、今回遺物・遺構は確認できなかった。現況においても天神社周辺は大規模に整地されており、天神社西側に積まれた石垣の中や周間に土師質土器の細片が見られることから、天神社付近の遺跡は既に破壊されている可能性が高いと判断される。

また、天神社から南に上ってゆく尾根筋を中心に設けたC調査区内のトレンチについても、既に上砂の流失が著しく、ために遺跡の存在を示すような遺物・遺構については確認できなかった。しかしながら、トレンチ2・4からサスカイトの剝片やナイフ型石器が出土したこと、遺跡の存在を直接に示すものではないとはいえ、縄文時代以前にこの周囲へ遺跡のあったことを示唆するものであると評価できる。とはいっても、花崗岩のしかも瘦せ尾根となっている現状では、その遺跡も既に流失していると考えてよい。

さらに、発掘調査の終了後、T事予定地内の樹木の伐採の完了した段階などに現地の立会調査をおこなったが、根を振り返した直下は花崗岩の岩盤が露出しており、遺物・遺構などは確認できなかった。

これらのことから、今回の調査に関しては、T事予定地内に遺跡は残されていないと結論付けられる。しかし、真鍋島全体としてみれば、城山採取のものを含めてナイフ型石器の出土に示されるように、この島も他の笠岡諸島の島々と同様に、陸化の進む瀬戸内海の低地を見下ろす台地上におそらく小規模の遺跡を点々と残していたのではないかと推測される。

この意味からも、島地部内の山筋については、特に詳細な分布調査がおこなわれていないことを念頭に置いたうえで、今後の開発行為などに留意することが必要と思われる。

また、今回の調査ではごく少量の出土のため、時期などについても未確定の部分が多いけれども、中世真鍋氏に関連する遺物・遺構にも留意する必要があろう。島地部における中世城郭の一つとして、真鍋城を中心とする関連施設を含めた実態も今後の検討課題である。事実、今回の調査に係り真鍋島島内を踏査したところ、城山の真鍋城跡から東に下る尾根の鞍部付近で土師質土器を少量採取した。

真鍋島は古くから民俗学のフィールドとして多くの研究成果を提供している地域であるが、今後は、史跡や石造美術品だけにとどまらない一体的な調査も島の歴史・文化の解明のために必要であると考える。そして、それが可能であるという意味において興味深い地域であるといえる。

## 第4章 付 篇

## 第1節 天神鼻遺跡出土の土師器・須恵器について

ここに紹介する遺物は、天神鼻遺跡出土と伝えられる土師器・須恵器である。

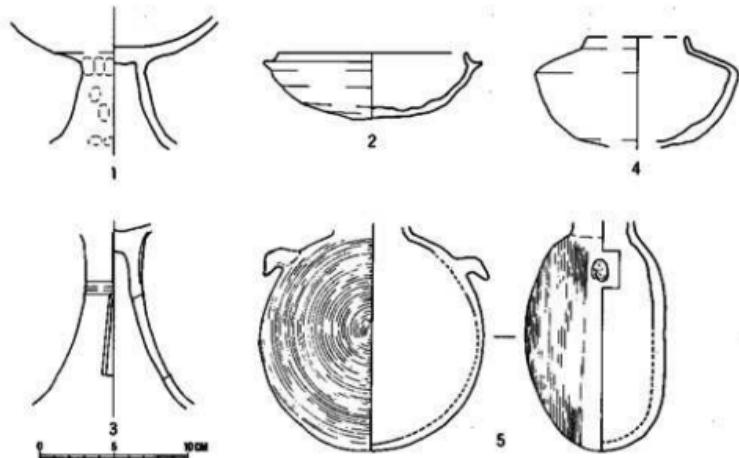
天神鼻の名前の由来ともなっている天神社で、明治35年に防風壁としての石垣が建てられたときに天神社の土台付近から出土したといわれるもので、土師器1点と須恵器4点である。

出土の際の状況については詳細不明であるが、完形品を含むなど保存も比較的よく、また、現在の天神社の北側に古墳があったといわれていることから推測して、古墳の副葬品であったと考えられる。その古墳については、本文でも述べたとおり、現状では確認することができなかった。古墳の推定場所を含め、天神社周辺には花崗岩の露出が多く見られ、特に天神社北裏には石室らしき石組もわずかに認められる。總じて、天神社は元来、やや北側に建てられていてともいわれており、天神社の建て替え・防風壁の築造・付近の整地などの結果、古墳は破壊・埋没したものと推測される。

以下にそれらの遺物について略述する。

土師器については、高杯が1点（1）である。脚部付近のみ残っており、その最小径は4.3cmを計る。杯部は内外ともに丁寧なナデ調整がおこなわれており、脚部外面には指頭圧痕が残っている。胎土は細かい砂粒を含み、焼成は良好。明黄褐色を呈する。

須恵器については、4点ある。



第14図 天神鼻出土土師器・須恵器実測図 (1/4)

杯身は完形のものが1点(2)ある。口徑12.7cm、器高4.4cmを計る。口縁端部はヨコナデにより整形され、外面のヘラケズリはおよそ1/2以下である。ロクロは左回りである。

胎土には1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好である。暗青灰色を呈するものである。

高杯は、脚部のみのものが1点(3)ある。最小径3.9cmを計り、全体としてほっそりとした印象を与えるものである。2方向に2段の透かしを有するものの、上側のものは浅く、内側にまで達していない。胎土は1mm以下の砂粒を含み、焼成は良好。暗青灰色を呈する。

短頸壺は、1/2以下残っているものが1点(4)ある。口縁部のみヨコナデが施されており、最大径は中心よりもやや上にある。全体として、肩の張った印象を与えるもので、胴部下半は粗くヘラ削りをされている。口徑は復元径で3.7cmを計り、器高は同じく7.4cmを計る。胎土は1mm程度の砂粒を含み、焼成は良好。暗青灰色を呈するものである。

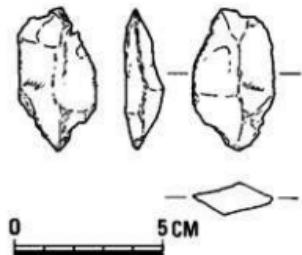
提瓶は、頸部を失ったものが1点(5)ある。胴部の最大径は15.3cm、厚さは9.5cmを計り、鉤はやや型式化している。胎土には1mm程度の砂粒を含み、焼成は良好。暗青灰色を呈するものである。

以上の土器は、時間帯はあるもののおおよそ6世紀後半代の時期のものと考えられる。真鍋島においては、現在までのところ古墳時代の遺跡はもちろん、古墳すら1基も確認されていないことからすると、これらの土器はその出土状況に疑問はあるものの、真鍋島の古代を知る上で貴重な資料であると判断される。

## 第2節 城山採取のナイフ型石器について

次に紹介する遺物は、真鍋島の西側の城山にて採取されたナイフ型石器である。

城山には本文にも述べたとおり、中世「真鍋氏」の居城であったとされる真鍋城跡が残っている。ここに紹介するのは、昭和38年にその城跡をおとづれた人が帰途に道ばたで発見したもので、地点としては、城川から本浦の集落へ降りてくるあたり、ちょうど本浦の港の東側の山魁の斜面付近と考えられる。

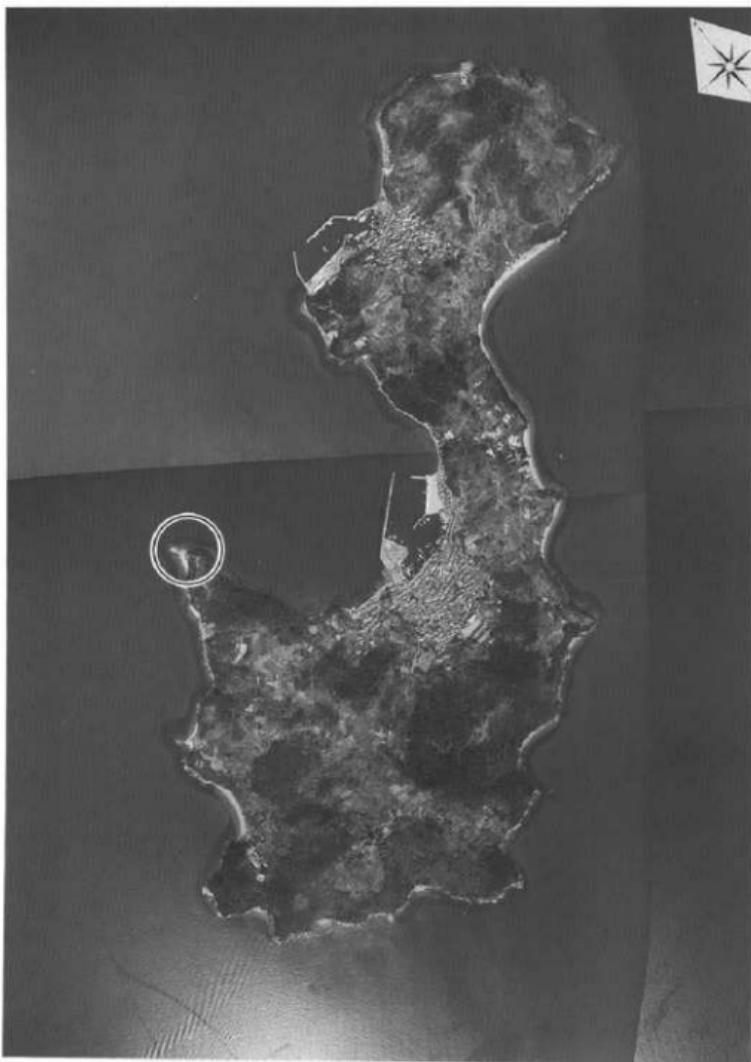


第15図 城山採取石器実測図 (1/2)

断面菱形で、長軸方向で4.75cm、短軸方向で2.75cmを計る。縦長剥片を用いて、側面に一部刃部形成が認められることから、ナイフ型石器と判断した。

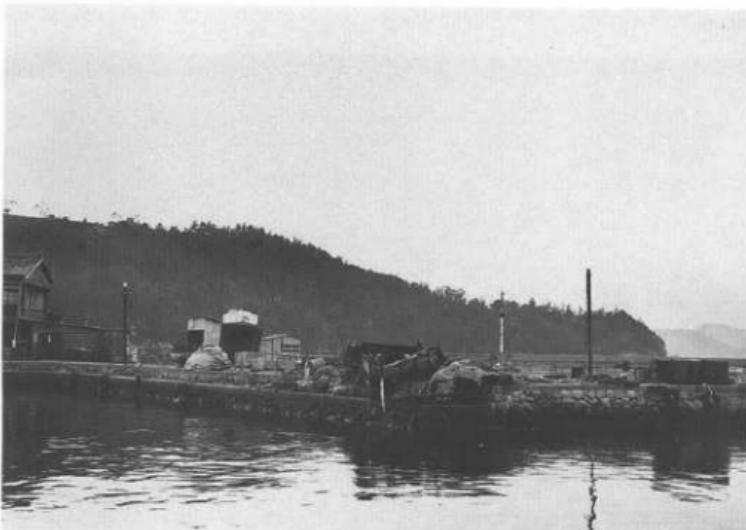
ナイフ型石器に限らず、サスカイト片も含めてのものは笠岡諸島の各所で採取されている。犬神鼻での出土と合わせて、真鍋島においてもそれが確認されたことにより、縄文時代以前の遺跡が真鍋城跡付近に存在する可能性を示唆するものといえる。

なお、付篇で紹介したこれらの資料はいずれも真鍋島歴史民俗資料館に収蔵・展示されており、その発表に際しては、管理者の真鍋礼三氏からは快諾をいただくとともに、有益なご教示をいただいた。記して厚く感謝します。



第1図 真鍋島空撮写真 (○印が天神鼻遺跡)

図版2



第2図 天神鼻遺跡遠景（本浦港から西を臨む）



第3図 天神鼻遺跡調査着手前（A地区周辺）



第4図 天神鼻遺跡調査着手前（天神社から南を臨む）



第5図 天神鼻遺跡調査着手前（C地区周辺）

図版4



第6図 A地区調査風景



第7図 A地区調査終了写真（南側から）



第8図 B地区調査終了写真（南側から）



第9図 C地区調査風景

図版6



第10図 トレンチ1 調査終了写真（北側から）



第11図 トレンチ2 調査終了写真（西側から）



第12図 トレンチ3調査終了写真（東側から）



第13図 トレンチ4調査終了写真（北側から）

図版8



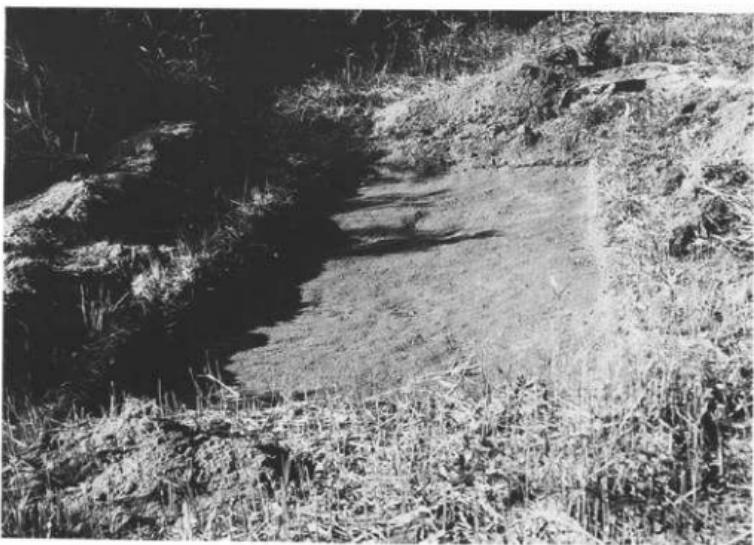
第14図 トレンチ5 調査終了写真（西側から）



第15図 トレンチ6 調査終了写真（南側から）

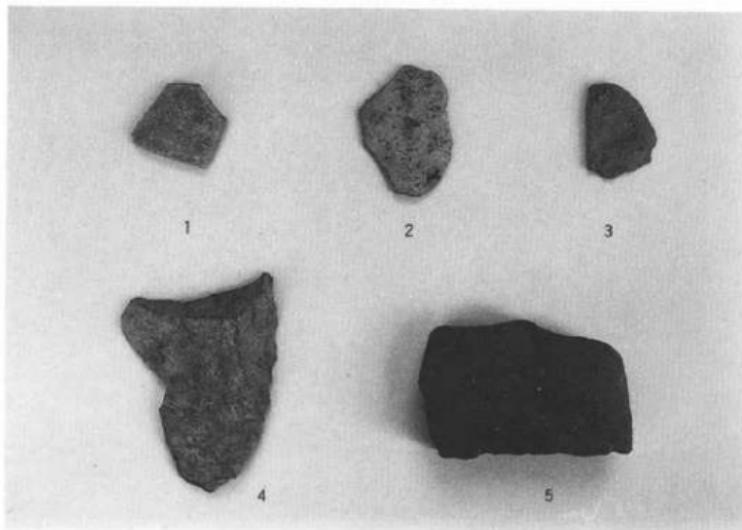


第16図 トレンチ7調査終了写真（北側から）



第17図 トレンチ8調査終了写真（東側から）

図版10



第18図 トレンチ出土遺物



第19図 天神社（南側から）

笠岡市埋蔵文化財発掘調査報告 2  
コミュニティ・アイランド推進事業に伴う  
**天 神 鼻 遺 跡**

昭和63年3月20日 印刷  
昭和63年3月31日 発行

編集行 笠岡市教育委員会  
印刷 西日本法規出版株式会社

